

幕末明治の写真師列伝 第十回 下岡蓮杖 その九

久之助（蓮杖）はショイヤー夫妻を通じて、ウィルソンに写真術を覚えてくれるように頼むも、久之助自身は言葉も通じず、ウィルソンも同業者が増えるのを嫌がり写真術を教えたくなかったのだが、横浜在留の宣教師 S.R. ブラウンの娘、ジュリア・マリア・ブラウン・ラウダーがウィルソンに付いて写真術を学ぶようになると、このラウダーを通じて久之助もようやく写真術を学ぶようになった。しかし、ウィルソンの館に撮影に訪れる客の外国人も少なく、ウィルソンは暗室作業などの肝心な点を久之助に何一つ教えようとはしなかった。

ジョン・ウィルソン（John Wilson）については、元横浜開港資料館、横浜都市開発記念館の調査研究員をされていた斎藤多喜夫先生により、現在、かなり具体的なことまで明らかになっている。斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』（吉川弘文館、2004年）の「判明した『ウルシン』の正体」によれば、ジョン・ウィルソンの来日の正確な年月日は不明だが、万延元年（1860）の末にはオイレンブルクの率いるプロシヤの使節団に写真家として雇用されていること（註：オイレンブルクの使節団は、日本には1860年9月到着）や、米国初代駐日総領事ハリスの書記官ヒュースケンの遺体の写真（万延元年12月5日<1861年1月14日>ライデン大学写真絵画博物館所蔵）が、ジョン・ウィルソンによる写真であることが判っている。ヒュースケンは、万延元年からオランダ語通訳のいないオイレンブルクの使節団を助けるために、使節が幕府と交渉する際の仲介役で、アメリカ大使館に帰る途中、芝薪河岸の中の橋付近で、尊王攘夷派浪士組所属の薩摩藩士・伊牟田尚平・樋渡八兵衛らに襲われ、翌日死去した。オイレンブルクの報告書の中には、このヒュースケンの遺体の安置された場所にジョン・ウィルソンがいたことが記されている。それにしても久之助（蓮杖）が横浜でこのジョン・ウィルソンと出会ったことは、先のヒュースケンと久之助の関係を考えると、不思議な縁を感じる。また最近では、古写真研究家のセバスチャン・ドブソン氏が当時のドイツの絵入り新聞に、ジョン・ウィルソンの

写真を元にした版画が掲載されているのを発見された。

前記、『幕末明治 横浜写真館物語』のウィルソンの文久元（1861）年12月27日付パスポートの記載によれば、ウィルソンの生地はアメリカ、ニューヨーク州オルバニー、年齢は45歳、身長5フィート6.5インチ、目は青色、鼻はギリシャ風、髪は灰色、顔型は卵型となっている。ウィルソンは横浜でプロイセンの使節団に雇用されて江戸に行き、使節団の帰国後横浜に戻り、文久元年（1861）8月に九十七番地所（現在の山下町97番地）の借地権を取得して、それをショイヤーに転売している。（註：浮世絵師五雲亭貞秀の「御開港横浜大絵図二編 外国人住宅図」に描かれたその建物には、「アメリカ廿五番 画ヲ能ス女シヨヤ住家」と注記されている。「画ヲ能ス女」とはショイヤー夫人アンナのこと）しかし、この件は後に、ショイヤーが居留地内に別に土地を保有していることやその借家を様々な国籍の第三者に又貸ししていたため、幕府よりこの建物の返還を求められて訴訟されている。（註：参考文献 斎藤多喜夫「横浜居留地成立史の一齣～横浜在留米人ショイヤー貸家徴還一件～」、『横浜開港資料館紀要』一三号、1995年）ウィルソンは文久元年（1861）12月末日に日本を離れ、翌年5月頃にロンドンに到着し、パノラマの展示会を開催している。文久元年（1861）の年末、出国する前に、ウィルソンは写真機材と薬品類を久之助に譲り渡して、その代わりに久之助が画いた日本の景色風俗のパノラマ画86枚と交換していたのである。こうして久之助はウィルソンから写真機材と薬品類を得て大まかな写真術の工程は理解できたものの、薬品の調合、現像などの詳細な事についてはまだまだよくわからないことも多く、ウィルソンがショイヤーに転売した写真館で、ラウダーに手ほどきを頼み込み、本格的な撮影から現像技術までの研究を始める。こうして久之助はウィルソンが調合し残した薬品を使って現像処理を行い、写真撮影に成功することができた。写真蓮杖の誕生である。

（森重和雄）